

『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響

田 島 優

はじめに

江戸時代の方言研究書である『物類称呼』（越谷吾山著 安永四年／一七七五）と、ほぼ同時代の国語辞書である『和訓栞』（谷川士清著 安永六年／一七七七、明治二〇年／一八八七）とには、よく似た方言記事が見られる。その影響関係については、まったく異なった二つの意見が提出されている。本稿では、両書の方言記事を検討することによって、『和訓栞』が『物類称呼』の記事を引用していることを明らかにし、その引用が安永六年に刊行された前編（あくそ）の「こ」の部あたりから始まっていることを指摘する。

一 二つの説

東条操氏は、「倭訓栞後編の方言」（『国語と国文学』一二巻九号 一九三五年九月）⁽¹⁾において、『物類称呼』と

『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響

『和訓栞』の後編との関係について、次のように結論づけている。

・この（注、『和訓栞』のこと）後編は前中両編の拾遺の外に俗語方言を収めてあるが、少なくとも方言に関するものは後人の手によつて増補された部分が極めて多く、而も其増補には物類称呼の本文を更改して用ひられたものと思はれる点がある。

・倭訓栞の方言中物類称呼に関係なしと見られるものは一国、一地方の短い記載であつて数ヶ国にわたるものは大概物類称呼との関係を見出す事が出来る。

・倭訓栞後編中の相当の部分占める方言がかく、多く物類称呼によつて増補された事は、後編全体に後人加筆の条の少なからざるを暗示するものである。或はこの後編に当る土清翁の遺稿は極めて僅なものでなかつたかと推測されるのである。

また東条氏は、岩波文庫の『物類称呼』（一九四一年）の解説においても、『和訓栞』後編の方言記事は『物類称呼』によつてゐることを述べている。

方言を採録した辞書の類も多くは本書（注、『物類称呼』のこと）を材料としてゐる。俚言集覧は書名を挙げて再録してゐるが、倭訓栞後編の方言なども本書に依つたものが頗る多い。（一八八〜一八九頁）

東条操氏は、『和訓栞』の後編に限定しているが、そこに見られる『物類称呼』と共通して見られる方言記事は『物類称呼』に依拠していると考えている。この考えに對立する意見を述べているのは、杉本つとむ氏である。しかし、杉本氏の考えも徐々に変化が見られる。杉本氏の考えを辿つてみることにしよう。杉本氏は、八坂書房の

『物類称呼』（一九七六年）の解説において、次のように述べている。

なお東条操先生は、『倭訓栞』（後編）の方言が本書によっているものが（頗る多い）（解説、一八九ページ）と指摘されているが、土清は安永五年には死没して、『和訓栞』はおそらく、『物類称呼』よりも早く成立している。流布の状況については明言できないが、何らかの形で書写されたり、回読されたのではあるまいか。したがって、むしろ影響は逆で、本書（注、『物類称呼』のこと）が何らかの方法で『倭訓栞』の方言を採択——誤りを訂正しているのもそのため——したと考える方が正しいのではないかと思う。（一九三頁）

この文章は、後に『方言研究はどう探究されたか 杉本つとむ日本語講座2』（桜楓社 一九七九年）に所収され、次のように一部に手が加わっているが、結論的には変更はない。

『和訓栞』はおそらく、『物類称呼』より早く成立していると考えてよからう。（二三九頁）

また、『方言に憑かれた男 越谷吾山』（さきたま出版会 一九八九年）では、『和訓栞』の序文にあたる大綱において、『物類称呼』の記事の内容と重なるところがあることから、次のように述べている。

以上のように、『物類称呼』よりもちの出版ながら、ほぼ同時代の刊行として、両者で記述しているところに一致共通するところがあるようです。決して土清が吾山のもの無断で利用したわけではないと思いますが、ある程度、資料をふくめて両者に共通した〈方言学〉的展望があったといつてよからうと思います。

（二二三頁）

この記述からは、『和訓栞』が『物類称呼』を引用した可能性がありえたようにも読みとれる。

『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響

杉本つとむ氏が『和訓栞』よりも『物類称呼』よりも成立が早いと考えた理由としては、『和訓栞』の凡例に「言語浩繁なれば簡帙もまた重大なるをもて分て三編とす今前編を刊行す此編もはら古語雅語を解釈するもの也」とあることから、土清の生前において『和訓栞』前編・中編・後編の三編すべてが完成していたと考えたのである。土清がなくなる前年に『物類称呼』が刊行されたのであるが、それを参考として大部な『和訓栞』に手をいれることは無理だったと判断したことによると思われる。

二 『和訓栞』の成立

両者の関係を明らかにするためには、まず『和訓栞』の成立について見ておく必要がある。『物類称呼』の刊行が安永四年（一七七五）、谷川土清の没したのがその翌年の安永五年、そして『和訓栞』が刊行され始めたのがその翌年の安永六年である。『和訓栞』は安永六年にすべてが刊行されたのではない。五回に分けて出版され、一〇年後の明治二〇年（一八八七）までかかってようやく完結したのである。その刊行について、示すと次のようになる。

前編（あゝそ）首巻・巻二〜巻二三（一四冊） 安永六年（一七七七）

（たゝほ）巻一四〜巻二八（一〇冊） 文化二年（一八〇五）

（まゝお）巻二九〜巻四五（一〇冊） 文政一三年（一八三〇）

中編 全三〇冊

文久二年（一八六二）

後編 全一八冊

明治二〇年（一八八七）

東条操氏は『和訓栞』後編に後人の手が加わっていることを示唆しているが、文化二年に刊行された前編の（たゝほ）において既に後人の手が入っていることを、北岡四良氏が文政一三年に刊行された巻四五末に付された土清の孫である土行の跋文（文政一一年五月）を挙げて指摘している。その跋文には次のように記されている。

此書土清大人あらはしたまふ処にして 五十音を阿行より佐行まで刊行しおかれしを 土逸大人 父翁の遺稿を本とし 翁の学の友かき季鷹県主諸共にかうかへ正して さきに多行より波行までを刊行したまひき ことひ其校正しおかれしを刊行して前編を終る しかはあれと言語浩繁なれば此書に洩しは中編後編つきく刊行するをまちて合せ見給ふへし 近比をおのつらねかたかへるよし本居宣長大人考出られしかと 此書もはら先人遺稿のまゝを刊行するをむねとすれば 本のまゝにつらねおきつ

さらに北岡氏は、「ま」以降に季鷹の説を土逸が述べている箇所が見られることも、その証拠として挙げている。これらのことから、北岡氏は、中編や後編については、野村秋足による後編の序文や活版本（明治三一・三二年岐阜成美堂版）の跋文に示されているように、未定稿であったと推測している。

さるをみのゝ国岐阜のさとなる成美堂のあるし 上中二編をちりはめし板を購ひ得しも 此まきたらはねはあたら事におもひ愁ひ かの大人の故郷なる阿濃津に遣りてし 其下書をたつねいて いとゝ喜び譲り請たり されと年経しほとに しみの禍にかゝり よみかたきも はた写しひかめりとおもほゆるふしもなきにしあら

ねは いま一たひたゝしてよとこへるまにく おのれいささか考へさためてかく板にゑらせつる事とはなり
にたり(序文)

本書原板ハ誤字仮字違等少カラズ 又漢字漢語ニ多クハ送仮字ヲ附セサルカ故ニ 読ミ下シカタキ処極メテ多
シ 今之ヲ訂正シテ読ミ易キヤウニナシタリ 又原本中編後編ノ如キハ文辞往々蕪雜ニシテ意義サヘ幾ント通
セヌ処アリ(跋文)

三 『物類称呼』と『和訓栞』後編

明治二〇年に刊行された『和訓栞』後編については、東条操氏も北岡四良氏も、十清の草稿が未定稿の状態であつたと推定している。もしそうなら、『和訓栞』後編と『物類称呼』とに共通して見られる記事は、東条操氏が指摘するように、後人が『物類称呼』を参考にして『和訓栞』に加筆したと考へた方がよいように思われる。ただし、北岡四良氏は次のように述べて両者の直接の影響関係を必ずしも認めていない。

かつて、東条操氏は、「栞」後編の方言に就いて論ぜられ、「物類称呼」との関係が疑はれた。部分的には、また編によつては、なるほどと思はれる点もあるが、前編に収められた方言の如きは時期的にも、呼称の影響であると速断することは適當ではない。むしろ、「栞」も「称呼」も、共に採り入れた原典に比すべき方言書がなければならぬ。諸書に記載されてある方言を「栞」にとり入れたのは事実ではあるが、「呼称」とのみ

限ることは誤りであろう。⁽³⁾

この考えは杉本つとむ氏と共通するものであるが、両書に取り入れられたような多くの項目を扱った方言書の存在はまだ明らかになっていないし、次に見るような両書の記述方法からは、やはり『物類称呼』を参考にしたと考えた方が適切と思われる。

まず、地名表示においては、『物類称呼』の方が『和訓栞』よりも地名が詳しくなっている。

* かけざを 上野にみせざを 筑紫にならし 下総にみそざといふ 御衣竿の義 みそは御衣也 そはざをノ反也 (『和訓栞』後編 卷四 九ウ)

・ 衣架 かけさほ (俗称) ○上野にて○みせざは 下総猿嶋郡にて○みそざと云 筑紫にて○ならしと云 今按にみそざは御衣なり そはさほの反そなれば みそざと称するは古き詞なるべし

(『物類称呼』卷四 九オ)

この例では、『和訓栞』では「下総」としかないので対して、『物類称呼』では「下総猿嶋郡」とあり、詳しくなっている。

地名表示に関連して、一記事における地名の数は『物類称呼』の方が『和訓栞』よりも多いという状況である。

* いよめ かいつぶりの一名也 いよやかの義にや めはかもめのめに同じ 土佐にいへり又いちつぶりといふ 仙台にかはきしといふ 信州にめうない 遠州にめうちん 東国にむぐつ鳥 上州にかはくるま 駿河にひやうたんごといふ

(『和訓栞』後編 卷二 二二三ウ・二四オ)

・かいつぶり (是和哥に称するにほとり也 俗にいよめといふ) ○畿内及中国東武共に○かいつぶりといふ 上総にて○みほといふ 長崎にては○鳩にはといふ 土佐にて○いちつぶり又いよめといふ 遠州にて○めうちんといふ 東国にて○むぐつ鳥 武の神奈川にて○でつてうむぐつてうといふ 上州○かはぐるまといふ 信州にて○めうないと云 駿河にて○ひやうたんごといふ 仙台にて○かはきじといふ

(『物類称呼』卷二 四ウ・五オ)

この例では、『和訓栞』には見られない、上総や長崎、神奈川での方言形が、『物類称呼』には掲出されている。

また、先の記事の中に見られたが、『物類称呼』には長音や拗長音や促音の場合符号が付されている。これは『物類称呼』の凡例に、「又方言の読方とくほうには―をもつて知らしむ たとへば花鳥風月くは ちやう ふう げつ 如ごと此の類たぐひなり 余是よに准じゆんず」とあるように、発音への配慮がなされているのである。

このような両者の記述方法からは、『物類称呼』から『和訓栞』の記事を記述することは可能であるが、その逆は『和訓栞』の資料だけではかなり困難である。更に、『和訓栞』後編に見られる方言記事で『物類称呼』と共通しているものと対比させると、両者の間に語形が異なっているものが多く見られる。その場合、多くのものが『和訓栞』後編の方の誤りのように思われる。少し例を挙げてみる。

(上―『物類称呼』、下―『和訓栞』、条名は『和訓栞』による)

くちじやけーくりじやけ かへるゑんざーかて円座 どぶばすーとはす (以上 あさざの条)

けづり餅ーけづり餅 (かきもちの条) すかんこーすんこ こがねはなーこがね草 (以上 かたばみの条)

あめかすーかめかす (かつをむしの条) がばちーかあばち (ぎぎの条) まへがらまきーまつがらまき
まへがらみーまつがらみ (以上 きぬまきの条) 山なまこー山まなこ (なめくぢの条) など

このような状況を、杉本つとむ氏は、『物類称呼』が『和訓栞』の誤りを正したと見るのである。『物類称呼』が『和訓栞』の誤りを訂正するためには、北岡氏が述べるような両書の原典になるような書が存在がなければ無理であるが、先に述べたように、そのような書はまだ見つかっていない。『和訓栞』後編の序文や跋文からすれば、虫損などによって読みたいものになっていったための誤りと見るべきであろう。

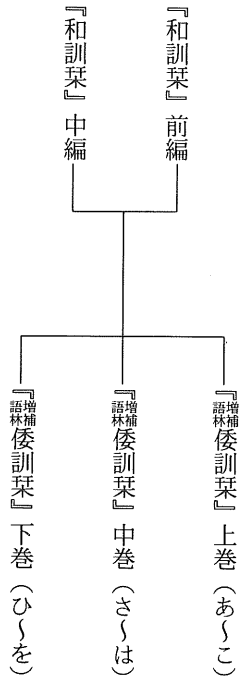
四 『和訓栞』前編(たゝほ)と『物類称呼』

明治二〇年に刊行された『和訓栞』後編については、上に見たように『物類称呼』を引用したものと思われる。前編や中編においてはどうかであろうか。土行の跋文が示すところによれば、文化二年に刊行された『和訓栞』前編(たゝほ)以降には、土清の子である土逸と土清の学友である加茂季鷹の手が加わっているようである。ただし、前編(まゝお)に見られたような、土逸や季鷹の説を引用したと明示された記述は見られない。これは、(まゝお)の刊行において、草稿に書き加えられた土逸や季鷹の説を土行が特記したためであろう。土逸が出版に関与した(たゝほ)においては、両者の意見は『和訓栞』の本文中に組み込まれているものと思われる。

ここでは、後人が関与したと思われる文化二年に刊行された前編(たゝほ)の中でも、最初の「た」と「ち」の

項における方言記事と『物類称呼』の類似性について考察していこう。

なお『和訓栞』の記事を扱う場合、現在活字で刊行されている『増補倭訓栞』（明治三一年刊行）は役に立たない。『増補倭訓栞』は、『和訓栞』前編と中編とを合わせて編集し直したものである。『和訓栞』では「お」がわ行に「を」があ行に入っているが、『増補倭訓栞』では「お」はあ行に「を」はわ行に配列されている。また『和訓栞』では第一音節だけ五十音順であったのに対して、『増補倭訓栞』では第二音節以降も五十音順になっている。両者の関係を示すと、次のようになる。



板本で刊行された『和訓栞』を用いて、「た」と「ち」の項目の方言記事で『物類称呼』と同じ見出し並びに同語形の方言語形が認められるものを見ていくと、ほぼ同一内容を持つ記事が一一項目見られる。『和訓栞』の記事を『物類称呼』と対照させ、両者の関係を、「一致度の高いもの」、「やや似ているもの」、「内容の異なるもの」の三段階に分けて、それぞれの分類に入ると思われる語の記事を、二書並べて示すと、次のようになる。ただし、引

用にあたっては、両書ともに関係する部分だけにとどめることにする。

◆ 「一致度の高いもの」 (九項目)

*たぐり 神代紀に吐をよめり 吐逆ともいへり たぐり上る意也 予州にて咳て痰を吐くたどるといふとそ

播磨に咳をたぐる 関西にてせたぐる (巻一四 一〇ウ)

○咳をせくと関東にていふを 関西にてせきをせたぐるといふ 播磨辺にて咳をたぐるといふ 阿波にては

せきをこづくと云 中国にて咳をこつるといふ 『物類称呼』巻五 一四ウ)

*たまけ 土左の西境にたまけるといひ 薩摩にたまがるといふ 下総にちめうしといひ 津軽にて動転した

といふ (巻一四 二七ウ・二八ウ)

○物を驚くことを 東国にて○たまげると云 下総にて○ちめうしたと云 津軽にて○動転したと云 出雲

にて○をびへると云又肝をつぶすと云 びつくりしたなどいふ詞は諸国の通語也 土左の西境にては○

たまげるといふ 上土佐中土佐には此称なし 薩摩にては○たまがる (『物類称呼』巻五 一五ウ)

*たも 樹にいふは月桂也といへり 或はたをにこりてよび又たまともいふ 玉の義 実をもて名を得たるな

るへし 西州にてはたぶともよへり つゝのみともいふ 線香の用とす 山城にたつの木 長門にこが

ひの木 西国につゞの木 伊予にはなが 土佐にあさだの木 上総にしほたま 伊豆に黒たまといふ

(巻一四 四六オ)

・楠 たふのき (和名たものき) ○山城にて○たつの木といふ 長門にて○こがいのきと云 西国にて○

『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響

つゞの木と云 伊予にて○はながと云 土佐にて○あぶらぬすびとのきといふ又○あさだの木とも云
上総にて○しほだまといふ 伊豆にて○くろだまと云

〔『物類称呼』卷三 一九ウ〕

*たらひ 倭名鈔に鹽をよめり (中略) たらひを南都(4)たいへ 陸奥に洗足はち 因幡にはんざうといふ

(卷一四 四七ウ)

・鹽 たらひ ○奥州南部にて○たいへと云 陸奥にて○せんそくばちと云 因幡にて○はんざうと云 江戸
にてみくだらひ匱盤をはんざう匱と云 又角つのだらひといふものは身たらいに角つのの有物也

〔『物類称呼』卷四 一〇ウ〕

*たるひ 垂氷也 俗につらゝといふ是也 今も仙台にはしかいふめり (卷一四 四八ウ)

参考 *つらゝ 信州にてすごほり 伊勢白子にてかなごといひ 越後にてかなこほりといふ

〔『和訓栞』前編 卷一六 三一オ・ウ〕

参考 *しがま 津軽にてつらゝをいへり 南部にてダベ墮氷といふ

〔『和訓栞』中編 卷一〇 二ウ〕

・氷柱 つらゝ (たるひ) ○越後にて○かな氷(こり)と云 奥の津軽にて○しがまといふ 同南部にて○だ墮氷と

云 仙台にて○たるひと云 会津及信州辺にて○すごほりといふ 西国及近江辺にて○ほだれと云 下
総にて○とろろうといふ 下野にてぼうがねと云 伊勢白子にて○かなごといひ 出羽最上にて○ぼん

だらと云 (氷柱垂氷の説は略す)

〔『物類称呼』卷一 四オ〕

*ちき 扛秤をちきといふも 神宮に搏風(チキ)高知すよりはかりて正直を求むる名なりといへり されどちは本名

きは木也 ちいの条考へし 関東にちぎり 越後に斤両といふ

(卷一五 三ウ)

・扛秤 ちぎ ○関西にて○ちぎと云 越後にて○きんれうといふ 関東にて○ちぎりといふ

『物類称呼』卷四 三ウ)

*ちそう 上総にほだめくといふ

(卷一五 五ウ)

・○他人を馳走する事を 上総にて○ほとめくといふ

『物類称呼』卷五 一四オ)

*ちまき 紀州にいふは絹まき也

(卷一五 一〇オ)

・きぬまき (きぬをまく物也)

○関西にて○きぬまき 紀州にて○ちまき 東国にて○まへがらまき 下

総にて○まへがらみと云

『物類称呼』卷四 二ウ)

*ちみん 丹波丹後に女色の事をいふ 長崎にしやんす 同丸山にがつと云 奥州にならび 南都(4)に契約

秋田にはなくり

(卷一五 一三オ)

参考 *ちかづき 薩摩に女色にいへり 土佐も同し 九州中国も同し

『和訓栞』中編 卷一四 二ウ)

・○女色の事を 丹波丹後にて○知音ちいんと云 父母のゆるさざる妻をちいん女房と云 (知音の二字は伯牙鐘子

期きの故事ニ出) 長崎にて○しやんすといふ (相思を唐音に唱るか) 同所丸山にて○がつと云 九

州及中国にて○ちかづきと云 長門にて人に始めて対面するを近づきに成とは敢あいはずして べつして

になると云 薩摩にては女色をちかづきと云 男色を念者と云 土佐にてもちかづきと云詞を恥らふ也

奥州にては○ならびといふ 南部にては○けいやくといふ 出羽ノ秋田にて○はなぐりと云

『物類称呼』卷五 二ウ・三オ)

◆ 「やや似ているもの」 (二項目)

*たぶ 関東にて髪のとをたぶといへり

(卷一四 二四オ)

・蟬髻挿 つとさし ○畿内にて○つとさし 東国にて○たぼさしといふ (関西にて云髪のとを東国にて

たぼといふ)

(『物類称呼』卷四 九ウ)

*ちふ 万葉集に云をちふと読り といふの略語 といノ反ち也 日本後紀の歌にも 鳴ちふ鹿のとみえたり

後に転しててふといへる也 今も上総土左の俗に遺れり 又西偏の俗いふをちふともいへりとそ

(卷一五 九オ)

・○なに事じやといふ事を 上総にて○あんだちふと云 会津にて○あんちふだびつちふだと云 あんだは何

ンぢや也

ちふは何々と云事をつづめて 何々 ちふ とも 何々 ちふ とも、何々 ちふ とも上代よ

りいひし言なり 恋すてふなど哥によめるも恋すといふ詞なり 長門又は土州の山家にて 何ちふと云

(『物類称呼』卷五 九ウ)

以上、士逸や季鷹が関与していると思われる文化二年に刊行された前編(たぐほ)の中でも最初の方である「た」と「ち」の項目における方言記事と『物類称呼』との関連について眺めてきた。一一項目中九項目において高い類似性が認められた。ただ、一番最初に挙げた「たぐり」においては、『物類称呼』に見られなかった予州の方言記事が『和訓栞』には記載されていた。『和訓栞』を見ていくと、伊予の方言と出羽の方言などが単独で挙げられていることが多い。『和訓栞』の編集にあたっては、ある地域の方言集を使用したようである。このように、一部他

の方言書も参考にしていたようであるが、前編(たゝほ)において『物類称呼』と一致する記事は、『物類称呼』を引用資料として利用していると考えられる。

五 『和訓栞』前編(あゝそ)と『物類称呼』

次に、『物類称呼』の引用が、土清の没した翌年の安永六年に刊行された、前編(あゝそ)には見られないのかどうか確認してみよう。この前編(あゝそ)については、先に見た文化一三年に刊行された巻四五末の跋文において、土清の孫である土行は、土清が刊行したものと見ていた。この部分においても、『和訓栞』の方言記事を『物類称呼』と対照させて、先の前編(「た」と「ち」)で扱った三分類に分けてみる。

◆ 「一致度の高いもの」⁽⁵⁾

* あじろ 魚にいふは讃州の方言 たかべなりといへり (巻二 一八オ)

・ 缸鱒魚 たかべ ○讃岐にて○あじろといふ 能登にて○とこやといふ (『物類称呼』巻二 二〇ウ)

* からくさ 草の名にいふは半辺蓮也 駿州にてかたいかりといふ 鉄猫児^{イカリ}に似て花の偏なるをもて也 賀州にて根せりともいふ 此草地に就て生し芹の気味あるをもて也 (巻六下 二八オ)

・ 連銭草 れんぜんさう ○江戸にて○かんとり草と云 駿河にて○かたいかりと云 加賀にて○ねぜりと云 此草地に付て生す 気味芹^カの臭有 鉄猫児^{イカリ}の形に似て花半分有によりて名つけてかたいかりといふ 花

『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響

又蓮の香有 故に半辺蓮の名有るべし 是 廣大和本草 の説なり

〔『物類称呼』卷三 一〇オ〕

*こち 中国の船人三月の風をへばりごちといふ 十月の風をほしの入ごちといふ 此ほしはすばるをいふ

凡て九月の節より正月の節中はすばる星の出入にひより変りやすし 江戸にては下総こちといふ

(卷九 二一ウ・二二オ)

・風 かぜ ○畿内及中国の船人のことばに 西北の風を○あなぜと称す 二月の風を○をに北きたといふ 三月

の風を○へばりごちと云 (中略) 九月の風を○はま西といふ 十月の風を○ほしの入りごちといふ

十一月十二月の頃吹く風を○大西せきと云 (中略) ○江戸にては東南の風を○いなさといふ 東北の風

を○ならないと云(つくばならないといふあり) 西北の風を○はがちと云 東風を○下総ごちといふ

未申より吹風を○富士南ふじと云

〔『物類称呼』卷一 一ウ〕

*こむら 讚岐にすばきと云 伊予にふくらと云 東国にふくらはぎと云 中国にひらますぼと云 備中の俗

しほづといへり 脚肚の意なり (最後の記事) (卷九 二六ウ)

・膾 こむら ○東国にて○ふくらばきといふ 信濃にて○たはらつばきと云 中国にて○ひるますぼといふ

讚岐にて○すばきといふ 伊予にて○ふくらと云 〔『物類称呼』卷一 一四ウ〕

*さをとめ 東国にて花菖蒲をさをとめ草といふ 江戸近在加賀にまひく虫をいへり (最後の記事)

(卷一〇 五オ)

・豉蟲 まいくむし ○江戸にて○水すまし 同近在にて○さをとめ 京にて○うずむし (略) 信濃に

て〇すめ 加賀にて〇さをとめ又しけく 伊勢にて〇たまる 『物類称呼』卷二 三〇オ・ウ)

*さま 長崎にて小児を称す (最後の記事) (卷一〇 三一オ)

・小児 をちご 〇京にて〇いと称す (略) 関東にて〇ねんねといふ (略) 信州にて〇あかといふ

(略) 越後にて〇ぼんごこととごふ (略) 奥羽にて〇わらしといひ又ぼこといふ (略) 長崎

にて〇さまといふ (同所にてごごと云は少女の事なり) 奥ノ南部にて末子はっしを〇よてこといふ 武蔵

下総にて〇てごといふ 『物類称呼』卷一 七ウ)

*さるぼゝ 赤貝の小なる物をいふは肉類の猿類に似たる也 即小蛸子也 朗光とも見えたり 南伊勢にちん

めがひといひ 筑紫に馬の爪貝 土左にたふがひ又血がひといへり (卷一〇 二七ウ)

・朗光 さるぼ 〇勢州にて〇つめきり貝と云 筑紫にて〇馬の爪貝といふ 土佐にて〇たぶかい又ちかい共

二云 『物類称呼』卷二 二二三ウ)

*しぐむ 物の咋合たる如く為出たる事にいふ 万葉集に角のふくれにしぐひあひけん見えたり 同義なる

へし 又しぐはすといふ 俗語もひあ反はなれは同語なりけんかし 東国にしぐむ又はむ 江戸には

にまかむ又びぐる 越後にけすむ 遠江にやにる 関西にわさるともいへり (この記事だけ)

(卷一一 八ウ)

・〇しぐむといふ事を 江戸にて〇はにかむと云 又びぐるともいふ 東国にて〇しぐむと云 又はがむと云

房総海辺にて〇がなづうと云 (がなづうとは寄居虫がうなの事を云 己おのれか家より外へ出る事あたはず内に

『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響

計居るにたとへたり) 遠江にて○やになると云 関西にて○わになるといふ 越後にて○けすむと云 万葉集二つのふくれにしぐひあひけん とよめり しぐひはしぐむといふにをなしと有

『物類称呼』巻五 五才)

*しやく 越後の遊女をしやくと称す 流れをくむの義也といへり (最後の記事) (巻一一 三三ウ)

○京大坂の旅人宿の下女を○はすはといふ 東海道筋にて○をじやれといふ 越後にて○しやくといふ (すこしの流をくむといふころなり) 相州小田原辺にて○ばくといふ (遊女をよねといへは

米に対したる表なり) 勢州にて○出女房といふ 又同国及美濃にて○もか共云 遠州にて○やぞうと

いふ 信州軽井沢にて○をしらくといふ 『物類称呼』巻一 一〇ウ)

*すつ 東国にほうると云 又うつちやると云 関西にはかすといふ (最後の記事) (巻一二 一四ウ)

○すてると云事を 東国にて○うつちやると云 関西にて○ほかすといふ (東国にて○ほうるといひ 越州にて○ほぎなげると云は投げやる事なり) 『物類称呼』巻五 八才)

*すばる 江戸にむつら星といひ 東国にて九曜の星といふ (最後の記事) (巻一二 一七ウ)

・昂 ぼう (すばる星と云 二十八宿の内也) ○東国にて○九ようの星と云 江戸にては○むつら星といふ 『物類称呼』巻一 一才)

*すわる 畿内にゐじかる 関東にへたばる 伊豆にきがる 但馬にへこたれる 長崎におらす 土州にゐざりといふ (最後の記事) (巻一二 一四ウ・一五才)

○居るといふ事を 日向及北陸道又下野辺にて○ねまるといふ 畿内にて○いじかるといふ 関東又は泉州
境辺にて○へたばると云 伊豆にて○ぎがると云 但馬にて○へこたれると云 長崎にて○をらすと云
土州にて○いざると云

*せこ 伊勢山田には小路をいへり 迫子なるへし (最後の記事) (卷一三 五オ)

参考 *せうち 大坂伊勢松坂にて小路を云 『和訓栞』中編 卷一二 二オ)

・小路 こうぢ ○京にて称す 江戸にて○横丁 (但式部小路 藪小路 又浮世小路など呼有) 大坂及

伊勢松坂にて○小路と云 勢州山田にて世古と云 『物類称呼』卷一 五オ)

*せんど 俗に物事を究め尽す意にいふも先途としての意也 相模にたうど 常陸にだらく 信州上州にもう
に 上総にどんど 遠江にじたゝたま 東国にしごたま 仙台によんこ 肥州によんにやうといへり
(最後の記事) (卷一三 一〇オ)

・京にてせんどと云 相模にて○たうどといふ 常陸にて○だらくと云 信州上州共に○もうにと云 上総に
て○どんどと云 遠江にて○しごくだまと云 東国にて○しこたまといふ 仙台にて○よんこと云 肥
州にて○よんにやうと云 是は余饒也 (『物類称呼』卷五 一ウ)

*そだ ○美濃尾張にはくぬ木に限りていへり (最後の記事) (卷一三 一七オ)

・柴 しば ○関西及中国陸奥辺にて○しばといふ (柴は惣名なり) 東国にて○そたといふ (美濃尾張
にてはくぬ木にかきりてそだといふ) 加賀にて○ほゑと云 (『物類称呼』卷三 二〇ウ)

◆ 「やや似ているもの」

* あい 畿内にはいと云 あは同韻通す (巻二 二オ)

・ ○ 他たを呼よびに答る語 関東にて○あいと云 畿内にて○はいと云 近江にて○ねいと云

〔『物類称呼』巻五 一九ウ〕

* ありく 薩州にてはさるくといふ (巻二 五三オ)

・ ○ 出るといふを (略) 又肥前及薩摩にてさるくと云はあるくなり (『物類称呼』巻五 六ウ・七オ)

* をんなめ 日本紀に妾をよめり 麻積名妻の義成へし 今も奥州などにはいふ詞也とそ 遊仙窟にはをんな

ごと訓せり 神代紀には女を訓す 土左日記にもむすめの事をいへり (巻五 一九オ)

・ 妾 おもひもの ○京師にて○てかけとよぶ 東国にて○めかけと云 西国及尾州にて○こひと云 (御妃

にや) 奥ノ南部にて○おなめといふ (『物類称呼』巻一 八ウ)

* かい 肥前にては桶をかいといふ 手桶をてかいといへり 古き書に水かいとみえたりともいへり

(巻六上 一オ)

・ 桶 をけ ○上下総州及武蔵にて○こがといふ (略) 常陸にて○とうご 豊州及肥前佐賀にて○かいと

いふ 長崎にて○そうと云 (『物類称呼』巻四 一〇オ)

* くり 応神帝の御哥にいくりとよみたまへり いは発語 石をくりといふは山陰の方言なるよし (万葉集抄

に見えたり 今も細石をくり石といふなり (巻八 二六オ)

・石 いし ○畿内にて○ごろたと云は石の小なる物を云 東国にて○石ころといふ 山陰道にてはくりと云

(細小なるものか) 越中にて○いしなといふ 江戸にて○じやりと云 (『物類称呼』卷一 五ウ)

*すがる (略) 倭名抄にはさそりと訓せり さゝりばちともいふ 常陸にかそりと云 出羽にては凡て蜂をすがるといふ 仙台にてすがりといへり (卷一二 三オ)

・蜂 はち ○仙台にて○すがりと云 (『物類称呼』卷二 二五ウ)

・蠟螈 じかばち ○畿内にて○こしほそと云 仙台にて○土ちすがりと云 常陸にて○かそりと云 信州にて

○ぢすがりと云 東武にて○じがばちと云 (『物類称呼』卷二 二五ウ・二六オ)

*すてご 筑紫にて老鴉蒜をすてごの花といふ 葉はなくて花さくをもてなりといへり (卷一二 一五オ)

・石蒜 しびとはな ○伊勢にて○せそび (略) 西国にて○すてごばな 肥ノ唐津にて○どくずみた (『物類称呼』卷三 八オ)

◆ 内容の異なるもの

この項に含まれるものは多いので、両書比較は後ろの方の二例だけにとどめ、他のものは見出し項目をだけを挙げておく。

*あか *あこ *あめ *いかし *いつはる *いな *いも *うら *かど *かはず *かや *こ

*こが *さめ

*ざる いかきをいふは箆籬の音也といへり 和名鈔にむぎすくひと訓し 下学集にはさうりいかきと注せり

甲斐のあたりにはいざるともいふなり 西国にてはさうけ 美濃尾張にてはしやうけといへり 是も筈の筈ケといへるなるへし (卷一〇 三七オ・ウ)

・筈 いかき ○畿内及奥州にて○いかき 江戸にて○ざる 西国及出雲石見加賀越前越後にて○せうけと云 武州岩附近にて○せうぎ 安芸にて○したみ 丹波丹後にて○いどこ 遠江にて○ゆかけ 越後信濃上野にて○ぼてといふ (『物類称呼』卷四 四オ)

*しの 綿筒を関東にてしのといへり (卷一一 二〇オ)

・綿筒 わたあめ ○京大坂にて○ぢんぎ 西国にて○けいまき又○しのまき 土佐にて○へちま又○しのまき 尾張にて○あめ 越後にて○しの 武蔵にて○しのまき 遠江及安房上総常陸にて○よりこ又ねぢこ 豊前豊後にて○まるわたと云 (『物類称呼』卷四 三オ・ウ)

『和訓栞』前編(あくそ)においては、先に扱った前編(たくほ)の部とは異なって、「内容の異なるもの」や「やや似ているもの」ものも多く見られた。一方、「一致度の高いもの」は、「こ」の部の辺りから次第に多くなってくる。しかも、その項目において最後の記事であったり、その記事単独であったりしているのが特徴的である。これは、「こ」の部以降の板下書きの段階で、『物類称呼』を参照しえたことによって、既に完成していた草稿に追加したのではないかと思われる。「こ」以降で、項目の途中の記事であるのは、「こち」と「さるぼぼ」だけである。「さるぼぼ」の項目では、『物類称呼』の「勢州にて○つめきり貝と云」に対応する箇所が、『和訓栞』では「南伊勢にちんめがひといひ」とあり、草稿にあった記事に新たに筑紫と土佐の方言形を補充したのではないだろうか。

「こち」については、『和訓栞』と『物類称呼』とは共通した資料を利用したのかもしれない。ただし、この資料とは北岡四良氏や杉本つとむ氏の言われるような『和訓栞』や『物類称呼』全体に共通するような多くの項目を含んでいるようなものではない。「こ」の部以前にも、「一致の高いもの」として「あじろ」「からくさ」があったが、「からくさ」は両書ともに『広大和本草』を利用したものと思われるが、「あじろ」⁽⁷⁾についても『広大和本草』などの本草書を利用したのではなからうか。また、「一致度の高いもの」において「こ」以降の「最後の記事」として記された中で、「こむら」の記事には『物類称呼』には見られない「備中の俗しほづといへり」という記述が見られる。これは「中国にひらますぼと三云」という記述に対して、中国地方の中でも備中では異なる言い方を知っていたことよって記したのであろう。特に本草関係については、『物類称呼』と共通の資料や別の資料を参考しえた筈である。『物類称呼』や『和訓栞』の方言記事の解明には、本草書における方言記事と対比させる作業が必要とならう。

『和訓栞』前編(こゝそ)における『物類称呼』の引用を、先に完成していた草稿に追加したものではないかと述べたが、これは「やや似ているもの」や「内容の異なるもの」が「こ」の部以降にも見られることから察せられよう。この追加が、谷川士清自身が行なったものなのか、士清の子の士逸と士清の学友であった加茂季鷹の手になるものなのであろうか。『物類称呼』が刊行されたのが安永四年正月、士清が亡くなったが翌五年の一〇月であるから時間的には可能であるが。

おわりに

『和訓栞』と『物類称呼』との影響関係について、両者の記事を対照させて考察してきた。その結果、両者に共通する方言記事は、『和訓栞』が『物類称呼』を参照していたことが明らかになった。この結論は、東条操氏の指摘と一致する。ただし、東条氏は『和訓栞』後編について述べているだけであった。東条氏の扱わなかった前編・中編についても詳細に眺めていくと、安永六年（一七七七）に刊行された『和訓栞』前編（あくそ）における「こ」の部あたりから参照が始まっていることが明確になった。ただし、この引用は草稿に追記する形で行なわれたものと思われる。文化二年（一八〇五）に刊行された前編（たくほ）では、『物類称呼』と一致する記事は、その項目において最後に記されている記事ばかりではないので、新たに編集し直されているようである。この前編（あくそ）における追記が、谷川士清自身によるものなのか、前編（あくそ）に次いで刊行された前編（たくほ）において行なわれたような士逸と季鷹によるものなのかという点については、現時点ではまだはっきりした答えを提出できない。

『和訓栞』における『物類称呼』の引用態度には、不可解な点が多く見られる。たとえば、『物類称呼』の記事を『和訓栞』では二項目、三項目に分割して引用している場合がある。これは、前編（たくほ）において言及したところの「たるひ」に関連して挙げた「つらら」（前編）と「しがま」（中編）。「ちるん」に関連しての「ちかづき」（中編）。前編（あくそ）における「せこ」に関連しての「せうぢ」（中編）。特に「しがま」や「ちかづき」や「せ

うぢ」は中編に取り挙げられている。『和訓栞』における『物類称呼』の参照が前編の「こ」の部のあたり、それも既に完成していた草稿に追記する形での引用であることからすれば、「しがま」や「せうぢ」はその項目自体が前編（あくそ）の草稿の中に含まれていなかったことによって、中編で取り挙げたとも考えられる。しかし、それならば、「たるひ」の項の中に「しがま」の記事を、また「せこ」の中に「せうぢ」の記事を含めることも可能であった筈である。また、「ちかづき」の場合は、前編に入れることもできた筈である。

このようなことを考えていくと、一つには、既に中編の草稿ができあがっていて、そこに「しがま」や「せうぢ」、「ちかづき」の項目があったとも考えられる。また一つには、『物類称呼』を参照した際に、その記事をもとに多くの項目に分割しカード化したとも考えられる。そのことによって、「たるひ」の項目に「つらら」や「しがま」を、「せこ」の中に「せうぢ」を、「ちるん」の中に「ちかづき」を入れなかったことになる。ただし、「ちかづき」は不注意によって前編に入れ忘れたことによって、中編に入れたのかもしれない。

『和訓栞』におけるこの四つの記事を見ると、「しがま」と「せうぢ」はその記事単独であり、「つらら」と「ちかづき」は別の記事とともに記されている。「しがま」と「せうぢ」は、前編（あくそ）にその項目がなかったことによって中編で取り挙げた。そして、「つらら」は、前編（たくほ）の草稿にこの項目があったことによって、そこに組み込まれた。「ちかづき」は、中編の草稿にこの項目があったために、中編にまわしたと思われる。このような僅かな例ではあるが、次のようなことが言えるのでないだろうか。『物類称呼』を参照した段階で、その記事を多くの項目に分割し、その方言形と同じ項目が既に草稿にあるものはそこに組み込み、ないものは順次取り入

れるという編集方針であったと思われる。

『物類称呼』の記事の引用は、前編や中編だけでなく、東条操氏が考察したように後編にも多く見られるのである。前編（あゝそ）を刊行する段階で、中編と後編がどのような状況であったのか興味がわくところである。その手がかりが得られるかわからないが、とりあえず前編・中編・後編における『物類称呼』の記事の引用状況を明らかにし、整理する必要がある。

『和訓栞』においては、出典が明記されずに引用されている場合が多く見られる。そのために、この書が何を参照し、どのように成立したのか、まだ不分明な点が多い。⁽⁸⁾『和訓栞』についての研究が進展することを望む次第である。

注

- 1 後に『方言の研究』（刀江書院 昭和二四年）、『東条操著作集 第3巻』（ゆまに書房 平成八年）に所収。
- 2 北岡四良「和訓栞成立私考——土清と真淵との関連で——」（『皇学館大学紀要』第六輯 昭和四三年）後に『近世国学者の研究』（昭和五二年）に所収。曾孫である清逸というのも存する。『版本 和訓栞』も清逸の跋文である。
- 3 注2の論文の注記。
- 4 『物類称呼』で「南部」とあるものが、『和訓栞』では「南都」となっていることがある。「ちるん」の場合、『増補倭訓栞』では、この箇所を「南都（南部敷）」としている。『物類称呼』の板本の「南都」と「南都」の字形の違いを見ていくと、『物類称呼』の翻刻で「南部」となっているものの中には「南都」の可能性がありそうなものが見られる。この点については別稿を用意している。

5 ここでは、『物類称呼』からの引用の状況を明らかにするために、「一致度の高いもの」の項においては、『物類称呼』と一致する記事が最後に記されているものとその記事単独のものに限って、「最後の記事」、「この記事だけ」といった注記を施した。

6 『広大和本草』には次のように記されている。

半辺蓮 和名カラクサ 賀州方言ネゼリ 駿州方言カタイカリ 此草地ニツイテ生ス 気味芹ノ臭アリ 故ニ根ゼリと云

鉄猫児ノ形ニ似テ 花ハンブンアルニヨツテ 名テカタイカリト云ナラン (中略) 或人云 此花香蓮華ノニホヒア

リ 故ニ蓮ノ名アルナラン マコトニシカリ (別録上 一七ウ・一八オ)

7 『広大和本草』には次のようにある。

缸鯛魚 和名タカヘ (中略) 讃州ノ方言ニアジロト云ナリ 能州ノ方言ニトコヤト云ナリ (巻八 二〇ウ)

8 『和訓栞』の成立や出典について扱った論考は、注2の論考以外に次のようなものがある。

・北岡四良「続・和訓栞成立私考——付 日本伊勢物語考について——」(『皇学館大学紀要』第七輯 昭和四四年)

後に『近世国学者の研究』に所収。

・尾崎知光編『和訓栞 大綱』(勉誠社文庫121 昭和五九年)

・三澤成博編著『鷹詞より見たる『和訓栞』に就いての研究』(平成九年)

・三澤成博『『和訓栞』所収の下学集について』(『日大』語文』一〇〇輯 平成一〇年)

・三澤成博『『版本 和訓栞』開題』(『古辞書影印叢刊』『版本 和訓栞』大空社 平成一〇年)

使用影印テキスト

『物類称呼』——『諸國方言物類称呼 本文・釋文・索引』(京都大学文学部・國語國文學研究室編 昭和四八年)

『和訓栞』——『版本 和訓栞』(大空社 平成一〇年)

『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響